

|           |                           |
|-----------|---------------------------|
| 氏 名       | まつ した ひめ か<br>松 下 姫 歌     |
| 学位(専攻分野)  | 博 士 (教 育 学)               |
| 学 位 記 番 号 | 教 博 第 28 号                |
| 学位授与の日付   | 平 成 15 年 3 月 24 日         |
| 学位授与の要件   | 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当   |
| 研究科・専攻    | 教 育 学 研 究 科 臨 床 教 育 学 専 攻 |
| 学位論文題目    | 心理臨床における離人症について           |

論文調査委員 (主 査) 助教授 河 合 俊 雄 教 授 山 中 康 裕 教 授 伊 藤 良 子

### 論 文 内 容 の 要 旨

「離人症」とは、例えば、「自分が自分でないような感じがする」、「外の景色が生き生きと感じられない」といったように、自己の精神過程・身体・外界にまつわる主体的なリアリティの喪失感として訴えられる症状体験である。その本質理解は研究者によって異なり、似て非なるさまざまな質のものが同じ「離人症」とされてしまっていることが指摘されている。このいまだ適切に捉え切れていない離人症の“質”にアプローチするには、離人症自身の生まれてくるところに立ち返り、離人症自身のリアリティと内包する問いの側から見ていく必要があると考えられる。

第1章では、従来さまざまに重ねられてきた離人症論を臨床心理学的視点から再検討し、離人症理解を大きく二分する立場として、「何らかのリアリティを感得する能力の障害あるいは欠如」として捉える視点と、Janet や精神分析における離人症論などから、「離人症はさらなるリアリティを求めるはたらきから生ずる」という視点の萌芽が抽出された。

第2章では、第1章での検討過程で、離人症の質的側面についてアプローチしうる視点として浮かび上がってきた、木村敏の「存在構造論」について、「存在構造尺度」作成の試みを通して実証的に再検討した。

存在構造論においては、自己や世界の成立にむけてのいとなみにおける①未知の次元にある、より純粋な自分を捉えようとする分裂病（統合失調症）親和的なアンテ・フェストゥムの契機、②これまで自己であったものが失われることを恐れるうつ病親和的なポスト・フェストゥムの契機、③こうした自己の成立を支える自発性としてのイントラ・フェストゥムの契機の3つの契機は、質的に区別される独立の概念であるとされる。基本的にはこの論は支持され、3つの契機を捉える視点が発見的な側面を捉えるものとして意義をもつことが示された。

第1章での従来の離人症論の問題点の整理から、離人症自体の問いを離人症者の言葉からより丹念に読みとり、よりつぶさに検討を重ねた、離人症の本質理解の上でいまなお特筆すべき論の一つとして、木村敏の離人症論をとりあげられていた。第3章では、この論の内包する視点を彼自身の「存在構造論」の視点から再検討された。その結果、離人症は、木村自身が結論するような「リアリティを捉える力の停止」によって生じるのではなく、「さらなるリアリティを求めるはたらき」によって逆説的に生じることが示された。さらに質問紙法による実証的研究により、分裂病（統合失調症）親和性の離人感と、うつ病親和性の離人感が、質的に区別された。

第4章では、離人症は単なるリアリティの欠如態という静的な事態でなく、より純粋な自己を捉えようとするほどつかみきれず、リアルに体験できないという逆説的で動的な事態であるという第3章の主張を踏まえ、その背後には「それまでリアルだったものを越えたものが生じつつある」ことへの気づきがあり、その体験面としての離人感とは「何かある」のに「まだうまく捉えられない」という体験自体のリアリティ」と考えられた。こうした言葉に尽くせぬリアリティの質にアプローチする視点として風景構成法の「構成型」をとりあげ、離人感との関係が検討された。離人感が発達的な構成型とは関係がなく、離人感と関係の深い型として「ほぼ1方向に定まった視向から遠近・立体的表現をもって風景が描かれながら、部分的に統合しきれない『空間』あるいは『微妙な空間のズレ・分裂』を残すもの」という共通点をもつ型が抽出された。

この型は下位分類の可能性を秘めており、その微妙な質の違いが明らかになれば、言葉では区別しがたい体験のリアリティの質の違いにアプローチする手がかりとなることが示唆された。

第5章では、離人症が中核的な問題となっている事例をもとに心理臨床における離人症の意味について検討された。面接過程の検討から、離人症は世間一般的なリアリティを問題としているのではなく、自ら自身や環境に対するコミットメントの深さや密度によって、新たに獲得すべき、自分自身や世界のリアリティの質を問題としていることが示された。それは、クライアント側の内的なリアリティの欠如や不足の現れといったものではなく、むしろ、新たなさらなるリアリティを求める動きであり、あるリアリティの次元から次のリアリティの次元に向かおうとする力がはたらいていることが示された。

加えて、離人症や離人症エピソードの出現は、本来明確な形のない自らや世界との関わりといういとなみの中に、自らと世界とを新たにつかみとり、それまでの自分や世界からの脱却を目指す、クライアントの内的な問いのあり方であり、同時に、治療者側の理解やコミットメントの微妙なズレや、面接自身が陥っている視座からの脱却をめざす間主体的な視点の現れでもあると考えられた。その「ズレ」はその都度のリアリティを的確に捉えた瞬間にはじめて出現する性質のものであり、そのズレの認識である離人症とは、それ自身が新たなさらなるリアリティを指し示す視点であり、これに適切に沿っていくことによって、クライアントも治療者も面接自身も、さらなるリアリティを獲得していくことが可能になると考えられた。

そうした、それまでのリアリティから脱却していくプロセスで、さまざまなイメージによってその都度のリアリティをつかんでいくわけであるが、一見リアリティの「欠如」や「不足」と見えるようなイメージの背後に、いわば、イメージそのものを支える「具体的なイメージを生み出す以前のイメージ力」というべき力がはたらいていることが示され、そういった背後的なコミットメントに治療者がいかに気づくことができるか、そうした力を捉える次元へと入っていけるかが、つかみきれないものをさらにつかんでいくことにつながっていくことが論じられた。

## 論文審査の結果の要旨

多くの精神医学や心理療法の理論において、心理的な症状が欠如態として否定的にしか捉えられていない傾向が強いと同じく、ここで取り上げられている離人症も現実感が欠けていることとして否定的な形でしか理解されないのが通例である。それに対して本論文は、離人症状も現実の一つであるという姿勢でアプローチしていったものであり、そこに学問的なユニークさと臨床的な貢献度を認めることができる。特に治療的な観点からすると、治療者の思っているただ一つの現実性に引きつけたり、それに向けてクライアントを変化させようとしたりしても、離人症というあり方をしているクライアントからはずれてしまい、本当のところは治療的には働かない。クライアントのあり方をまず現実として受けとめることから始めようという本論は、非常に臨床的な姿勢を持っていると言え、高く評価できる。

その中で本論は、特に離人症状を、現実感覚が欠けているから生じてくるのではなく、むしろ新しい現実感が生まれてこようとするところから生じてくるとみなしている。その意味で離人症状は現実感との関連では、特殊で鍵となる位置を占めており、いわば動的な現実感の発生そのものに関わっている。つまり心理臨床において現実感を問題にしていたり、あるいは新しい現実感が生み出されようとしていたりすると、必然的に離人感に突き当たることになる。従って離人症は多くのもののなかの一つの疾病単位を超えた意味を持ち、あらゆる心理臨床において登場することが考えられる。だからこそ本論文に、「心理臨床における離人症について」という一見すると不思議なタイトルがついているのである。

第1章では、離人症についての先行研究を丹念に検討することで、離人症については現実感の欠如という捉え方と、それとは異なって、離人症はさらなる現実を求める動きとしてとれるという見方につながると解釈できるものとの両方があることが見いだされる。この論文の主たる論点を文献研究からも導き出しているのは独創的な成果なので、もう少し自分の解釈のユニークさをアピールしてもよかったのではという指摘があった。

現実感が生まれてくるところを捉えるために、本論文は木村敏の存在構造論に拠っていく。主客未分であるノエシスが、自分を限定し、差異化していくことによってノエマとなり、またそのノエマが自覚的に捉え直されてメタノエシスになるという木村敏の理論は、まさに現実性が生み出されてくる事態そのものを捉えるのにふさわしいものである。しかし本論文の価値は、木村敏の理論を単に当てはめただけではなくて、むしろ「リアリティを捉える力の停止」としてメタノエシスの弱さをみてとる木村敏自身の結論とは異なって、離人症をメタノエシスの過剰として捉える独自の考え方を打ち出したところ

にある。つまり離人感とは、自覚のなさによって生まれるのではなくて、むしろその過剰によって生じてくるというのである。

木村敏の存在構造論が、未来志向的なあり方であるアンテ・フェストゥム、既存のものにこだわる過去志向的であるポスト・フェストゥム、現在においていわば底が抜けるようなイントラ・フェストゥムという3つのあり方を区別しているのに従って、本論文はそれを尺度化して、質問紙を作成している。木村敏の理論を、質問紙という形で実体化することには、疑問がないわけではないが、実証研究に繋げようという努力は評価できる。

上記の質問紙と、離人傾向との関連を調べたところ、離人傾向にアンテ・フェストゥムとポストフェストゥムに相関を持つタイプが抽出された。これは離人感が、分裂病（統合失調症）親和性の離人感と、うつ病親和性の離人感とに質的に区別されることを意味していて、興味深い。表面の症状としては同じ離人症のように見えても、背景のあり方は異なることが考えられ、これも臨床上の経験を裏打ちしているデータである。

第4章において、風景構成法の構成型と離人感の研究を行ったところでは、発達の視点を越えた捉え方をしているところが注目される。即ち離人感と相関の認められた構成型は、遠近法的に風景が構成されていながら、部分的に崩れているもので、遠近法の成立する一歩手前とも考えられる。けれども絵画における遠近法とマネリスムの関係から論じられているように、そのような遠近法の崩れは、遠近法にまだ至っていなかったり、正常な遠近法から欠如態として崩れていたりするのではなくて、むしろ積極的に遠近法を超えた現実性を捉えようとしているものとして理解されているのが興味深い。

第5章の離人感をともなった一事例から、クライアントがまさに現実を求め飛び出そうとするところから離人感が生じてくることがわかり、これまでに述べられていた離人症のとらえ方が確かめられている。ケースの流れのなかで、転機になると離人感が生じ、またそれはクライアントだけの問題にとどまらず、治療者との「ずれ」と、それによって生み出されてくる治療的で創造的な働きとして捉え直されているのは非常に興味深い。

事例検討に関しては、それはそれ自体で興味深い内容であるけれども、事例内容を突きつめていくと、論文全体の流れと、ケース自体の考察を深めるところが矛盾してきてしまうのがむずかしいところであった。また背景の理論としては、ラカンやユングから出発しているギーゲリッヒの考え方の方がよいのではという指摘もあった。しかしながら全体としては、離人症を新たな現実性が生まれようとするところから生じるという視点から書き上げてきた本論文は高く評価できる。

よって本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成15年2月13日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。